

PHOTO ESSAY

西条キャンパスの自然(植物)

-13-



理学部 事務長

室 繼 紀

(一) 誰故草
昔、「誰故にかくは可憐な花を開くぞ」と詠まれたことからタレユエ草の呼び名がある。この誰故草は、故牧野富太郎博士が愛媛県で発見された際にエヒメアヤメと命名されたことから、すでにあった誰故草とともに二つの名前を持つ花としても知られている。誰故草の自生地が西条キャンパスに近い三原市沼田西町にある。かつては西日本の各地に咲いていたといわれるが、近年は野生地が減り、絶滅の危機に瀕している。それでも三原市のか、広島県の甲奴郡、世羅郡に、また山口県では柳井市にわずかに自生地があり、天然

記念物の指定を受け、保護されている。
誰故草は四月中旬に、地上十センチくらいのところに直径四センチ大のコバルトブルーの可憐な花を咲かせる。毎年この時期を迎えるとテレビ、新聞でも報道され、多くのファンを引きつけていている。



誰 故 草

Iris rossii

Diospyros kaki

柿

(二) 柿の雄花

写真は柿の雄花を撮ったものである。乳白色のどうだんつづじかすずらんの花に似ている。通常は、特定の種類のもの以外、柿にはこのような雄花は咲かない。

平成六年五月下旬に西条キャンパス周辺の柿の木にことごとく雄花が咲いた。ふつう、柿の花は雌雄同一花で、緑色の小さな実の先に花がついているが、雄花には実も雌しへも無く、小さな葉に直接雄花がついている。この現象は柿の種類にかかるらず、又、若木、老木の別なく現れ、木全体が雄花を咲かせたものもあれば、一部の枝だけ

つけていている。

広島空港に隣接する中央森林公園には、広島県立農業技術センターが日本で初めてバイオ技術で増殖に成功した誰故草の苗が、総合科学部の中越研究室のメンバーにより移植・管理されている。いずれ西条キャンパスの中にも誰故草園が実現することと思う。

雄花になつているものもあるといた状況であった。見た人はみんなこのような柿の花を見るのは初めてだと驚いていた。発現地は西条地区だけでなく、広島市佐伯区でも同様に沢山見られたから放射能や農薬の影響とは考えられない。私は異常気象の影響だったのではないかと思つていて。前年の平成五年の歴史的な干天酷暑の天候であつた。さて、今年は杉花粉が沢山飛びかった。柿の雄花は咲くであろうか。(むろ・つぐのり)

